

音楽は心の栄養であり、言葉なしで理解し合える世界の共通語です

4歳でバイオリニストを志し、パリそして日本へ

—アテフさんとバイオリンの出会いについて教えてください。

音楽の好きな父の影響で幼い頃から家でクラシックを聴いていました。まだ2歳という小さなうちから、飽きずにおとなしく何時間も音楽を聴いていたようです。4歳の時にベルリン・フィルのコンサートに連れて行ってもらったのが初めて生で聴いたコンサート。チャイコフスキーのコンチェルトの素晴らしさにびっくりして、その時「僕は将来バイオリニストになる」と決めました。そして5歳の誕生日にバイオリンをプレゼントしてもらいレッスンを始め、9歳で本格的にキャリアをスタート。13歳で単身パリに渡り、その後20世紀の巨匠と呼ばれるバイオリニストたちに師事して研鑽を積みました。



—日本へ来たのはいつ、どんなきっかけだったのですか？

フランス国立管弦楽団に入り、コンサートマスターを務めるまでに至りましたが、25歳の時ソリストになりたくてオーケストラを退団。巨匠シェリングの下で修業し、ソロデビュー後はヨーロッパをはじめ各地で演奏やレコーディング活動を行っていました。オーケストラ時代にコンサートツアーで来た初来日のことは、正直あまり覚えていません。20代後半にパリの大学で哲学を学んだ時、仏教に出会い、日本文化に興味を持つようになりました。40歳の時、パリで私の演奏を聴いた日本人が、日本で

コンサートを企画してくれて、再来日。何度か日本を訪れるうちに、水が合うというか、「前世は日本人だったのかも」と思うほどに(笑)。そして平成5年に拠点を日本へと移し、その後日本人女性との結婚を機に、荻窪に暮らすようになってから今年で23年経ちます。

荻窪の銭湯で近所さんと「裸のつきあい」

—アテフさんは荻窪のまちのどんなところが気に入っていますか？

私は日本食や日本酒、焼酎が大好きなのですが、荻窪にはおいしい飲食店がたくさんありますよね。何を買うにもそろっていて、公共施設、交通機関も充実していてとにかく便利で住み心地がいい。特に私のお気に入り銭湯。1日に5時間、6時間と練習して疲れきった後は、銭湯に行き疲れを癒やしています。

—銭湯では地域の方との交流も生まれていますか？

はい、銭湯は私にとってたくさんの縁が生まれる場所です。日本で言うところの「裸のつきあい」はとても楽しいですね。おしゃべりしていても音楽の話はほとんどなく、相撲の話だったり、時には日本の文化を教えられると、さまざまな話題で盛り上がっています。銭湯で知り合った方がコンサートに来ると、「アテフさんお風呂にいる時と全然違うね」と言われます(笑)。地域の方が企画して、銭湯でコンサートを開催したこともあるんですよ。世界のいろんなまちで暮らしてきたけれど、こんなに長く暮らしたのは荻窪が初めて。そのくらい好きということですね。杉並区は芸術へのサポートにも力を入れていて、音楽家としてそんなところも心強く感じます。

杉並で届けた日本の曲。コロナ禍での思い

—昨年末には「杉並区新しい芸術鑑賞様式助成事業」として杉並公会堂でコンサートを開催しましたね。

コロナ禍では、私も含めて多くの音楽家、芸術に関わる人たちが活動の場を失いました。そんな中で、感染症対策をきちんと行って実施される活動に対して区が支援しているのが同事業です。昨年12月のコンサートは杉並区のサポートを得て開催することができ、とても感謝しています。

—コンサートでは日本の曲を演奏したそうですが、そこにはどのような思いが込められていたのですか？

長引くコロナ禍のなか、とにかくお客さんに元気になるしてほしい。そんな思いを込めて皆さんに親しみのある日本の曲を届けたいと考えました。私の好きな日本のメロディーと、聴きに来てくれるお客さんたちのリクエストも踏まえて、童謡や演歌、ポップスなどさまざまなジャンルの曲を選びました。私自身、日本の曲が大好きで、特に演歌はすごいと思います。昔から親しまれている日本の曲というのは、シンプルだけどとても深く、素敵なメロディーが多いという点で、実はモーツァルトやベートーベンの楽曲に近いものがあるんですよ。



手ぬぐいがトレードマークのアテフさん。杉並公会堂の公演ではオーダーメイドで仕立てた作務衣(さむえ)風の衣装で演奏しました(ピアノ:淡路七穂子)。

—コロナ禍で思うように活動ができなくなったことを、アテフさんはどのように受け止めましたか？

コンサートの中止が相次ぎ、がっかりして気持ちが重くなることもたくさんありました。でもそんな時、バイオリンを奏でると気持ちが明るくなったんです。音楽がなかったらすごく苦しかったと思います。また、コロナ禍は私たち音楽家の仕事に大きな打撃を与えたけれど、決してネガティブだけでなく、ポジティブポイントもありました。それは、以前はバラバラだった音楽家たちの間に連帯感が生まれ、世界中の音楽家を家族のような存在に感じ、思い合うきっかけになったことだと私は思っています。

たくさんの人にクラシックの素晴らしさを伝えたい

—バイオリンと共に生きてこられたアテフさんにとって、改めて音楽とはどんな存在なのでしょう？

音楽は、私たち人間にとっての心の栄養であり、言葉がなくても理解し合える世界の共通語だと思っています。だって、まだ日本語が全く分からなかった頃に私は美空ひばりさんの歌を聴いて心から感動しましたからね。音楽は言葉の壁を超える存在なのです。そして、コンサートを開く際はそのひとときを温かい時間、楽しい時間になりたいといつも願っています。これだけ長く演奏活動をしてきて、数え切れないほどコンサートをしてきても、実はステージに立つのは今でも毎回緊張して、すごく勇気があるんです。それでもやはりステージに立ち続けるのは、お客さんと私自身が、音楽を通してお互いのエネルギーを与え合うことができると信じているから。お客さんのことが大好きで、お客さんとのコミュニケーションが本当に喜びだと感じるからなのです。

—これから挑戦していきたいことはありますか？

バイオリンを始めてまだ間もない頃、「才能は、何が起きようとも誰

にも奪えないもの。だから努力してその才能を磨いていきなさい」と大好きな母に言われました。この言葉は今でもとても大切な教えです。これからも私のバイオリンでたくさんの人たちに音楽を届けたい。特に子どもや若い人たちにクラシック音楽の素晴らしさを伝えるために、まだまだ努力を続けていきたいです。100歳まで、まだあと30年ありますからね。学校や、子育て中のお父さん・お母さんが集まる場、高齢者施設といったさまざまな場所でのボランティアでのコンサート活動にも力を入れていきたいと考えています。



—最後に、アテフさんが音楽を通して伝えたいこと、区民の皆さんへのメッセージをお願いします。

音楽は平和のもとです。新しい世代の子どもたちをはじめ、誰もが音楽を聴いて平和な世界で生きていけることを願っています。杉並はすでに音楽と人の距離が近いまちですが、もっともっと子どもたちが生の音楽に触れる機会が増えると豊かですね。クラシック音楽は決して難しく堅苦しいものではありません。ぜひ機会がありましたらコンサートホールで生の演奏を味わってみてください。

すぎなみビト
interview
Atef Halim
アテフ・ハリム

プロフィール: アテフ・ハリム バイオリニスト。エジプト人の父とフランス人の母の間にカイロで生まれ、5歳でバイオリンを始める。13歳で単身パリへ渡った後、多くの巨匠たちに師事する。パリ音楽院卒。フランス国立管弦楽団を経てソリストの道へ。世界で演奏するバイオリニストとして活躍する中、拠点を日本に移す。今年で荻窪在住23年目。国内外で演奏を行い、CDもリリース。令和2年には奈良の東大寺大仏殿にて、新型コロナウイルス終息を願いバイオリンを奏でた。

抽選で3名に
アテフ・ハリムさんのCDをプレゼント!

右記3タイトルのいずれかをプレゼント!
※タイトルを選ぶことはできません。

応募方法
はがき・Eメールでご応募ください。
▶締め切り日=3月1日(消印有効)

【対象】区内在住・在勤・在学の方
【記入要領】①郵便番号・住所②氏名③年齢
④アテフ・ハリムさんのインタビュー、「広報すぎなみ」の感想・意見など

【宛先】広報課広報係
✉koho-suginami@city.suginami.lg.jp
※当選者の発表は、賞品の発送をもって代えさせていただきます。応募の際に得た個人情報、プレゼントの発送にのみ使用します。

【問い合わせ】同係

YouTubeで配信中!

紙面には掲載しきれなかった取材のこぼれ話も動画で紹介しています。

すぎなみビト MOVIE

すぎなみビト「アテフ・ハリムさん」のインタビューが動画でも楽しめます。右2次元コードからご覧いただけます。

杉並区公式チャンネル